

# 東方鬼人伝

ヴエルディ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある街で孤児として育つた17歳の少年「進来 翠」(しんらい  
みどり)

赤子の頃に、森に捨てられていた。という怪しい生い立ちが原因でイジメを受けたり、仲の良かつた友人を事故で亡くしてしまって、捨てられていた自分を拾い、育ててくれた義親も病気で亡くしてしまい、いつしか彼の周りでは良くないことが起こると噂されるようになつた……

何もかもを投げ出したくなつた翠はどうとうビルの屋上から身を投げ出そうしてしまうが……?

目

次

プロローグ

「1人の鬼と災人」

「1人の鬼と災人」その2

第一章「授かつた力」

「勝つ力と守る力」

「密の能力」

22 10 5 1

# プロローグ

（1人の鬼と災人）

第1話：終わり

…………

「…………もう、こんな時間か」

時刻は17時を過ぎたくらいだろうか、俺はビルの屋上で1人山の奥へと沈んでいく夕日を眺めていた。

俺の名前は「進来 翠」（しんらい みどり）。17歳の高校生だ。今まで食事に勉学に娯楽に、何不自由なく育つてきてた。  
：育つてきてたつもりだつた。

俺は赤子の頃、この街の近くにある伊吹山に捨てられていたらしい。

たまたまハイキングに来ていた夫婦が、「赤子の泣き声がする」と言つてハイキングコースを外れて探したところ俺がいたらしい。

実の両親の名前も分からぬ、なぜこんな所に捨てられて生きていったのかも分からぬ、わかつていたのは自分の名前だけ。

そんな俺をその夫婦はまるで自分達の子のように育ててくれた。

しかしこんな生い立ちのせいか、周りのヤツらにはいじめられ暴力を受けた。自分の身を守るために徐々に抵抗して、おかげで体力には自信があつた。高校生にもなる頃には陰口、そあつたものの俺に暴力を振るつてくる奴はいなかつた。

：しかしその高校生になつた年、俺のたつた1人の友人が事故で亡くなつた。友人も、その両親もまた俺を兄弟のように接してくれて、もう一つの家族のような感覚だつた。

悲しみに明け暮れていた所、もつと辛いことが起つた。  
先月、俺を育てくれた夫婦が病氣で死んだ。

その前にも不吉なことは多かつた。俺がよく通る道路で事故が頻

発したり、火災が起きたりなど…………いつしか俺は不幸をもたらすと  
して避けられるようになつた……

「…………こんな世界…楽しい事なんて何もないや…」

スマホをポケットにしまい、俺は屋上の鉄柵を乗り越え座り込んだ。

人生で最後にみる光景が山に沈んでいく夕日とは：：なかなかロマンチックじやないか。

そう思い俺は目を瞑り、身を投げる決心をした。その瞬間後ろから

「貴方はまだ死ねないわよ」

確かに女性の声だつたと思う。この屋上にはさつきまで俺以外いかつたはずだ。

突然聞こえてきた声に驚き目を開けて振り向いた

「…………あつ」

突如として吹く突風。その勢いに煽られて俺の体はビルの下へと落ちていった。

ああ：：これで終われるのか、いい人生とは言えないが少なくとも幸せや温もりはあった。重力に身を任せ体が落ちていく刹那、脳裏に今までの出来事、思い出が鮮明に蘇つた。いわゆる走馬灯と言うやつだろう。

楽しかつた夫婦との日常、ただ1人の友人と騒ぎ合つていた思い出。

果てには不幸をもたらすなんて言われた1人の青年の人生が……  
……終わる……

「いいえ、まだ終わらないわ」

またあの女性の声だ。幻聴でも聞いているのか？それとも死後の世界つてやつなのか？

しかしその疑問は一瞬で解けた。「生きている」という感覚がある。

目の前に見たことのない女性がいる。

「?」

仰向けの状態で倒れていた俺は驚いて体を起こした。辺りを見回すとそこは赤紫のような、黒のような、またはその二つが混ざりあっているような。そんな背景に無数の目がある。

「な、なんだあ…?…ここは…いつたい…」

そこはまるで地面の上のような、水の中のような、空中のような全てが曖昧な世界だった。こんな突拍子もない非現実的な世界をすぐに受け入れられたのはそこに「自分」という現実で確かな存在をしつかりと認識していたからだ。

「ここは『スキマ』と呼ばれる境界よ。」

目の前の女性が理解に苦しんでいる俺を見てそう答えた。髪は金髪、背は高め、雨も日光もないというのに傘をさしていて不思議な帽子を被っていた。

「はじめまして。私の名前は『八雲 紫』（やくも ゆかり）

言つても理解出来ないだろうから簡潔に説明させてもらうわ。

貴方にはこれから『幻想郷』という世界に行つてもらう。

貴方にとつては異世界とも言えるし同世界とも言える場所。

そこで貴方にはある化け物を倒してもらう

……理解が追いつかない。幻想郷？異世界であり同世界？化け物を倒す？

ファンタジー過ぎる。そんなものが実在するのか、と疑問に思った所で現状を見れば信じざるをえない。

「…一つだけ聞いていいか？えつと…八雲…さん？」

「紫でいいわよ。なにかしら」

この際、幻想郷だの化け物だの、そんな事は置いといつだけ聞くべきな事が浮かんだ…そう

「じゃあ紫、なぜ俺なんだ？」

俺がそう聞くと、紫はすこし微笑みこう答えた

「幻想郷に貴方を連れてこようとしたのは私じゃないのよ。

強いて言うなら別の人？かしらね」

人？ってところがすこし引っかかる気もするが…まさか人ならざるもの、とかじやないよな？

頭がこんがらがりそうだ、理解できないことが多すぎるので

おそらく長考してて固まっていたのだろう

それを見かねた紫が

「取り敢えずは幻想郷に言つてみる事ね……がんばつてね～w」

「……………ハア！？」

さつきまでの険しい雰囲気が一変、急に少しおちやらけたような性格になつた。満面の笑みであつた事は確かだが明らかに腹黒さがあつた。

紫が手を振つた途端、俺の真下に穴が出来た。途端に重力がかかり俺は真下へと落ちていつた……

そう、幻想郷に行つた時点で「外の世界」の俺の人生は終わつたのだ

そして幻想郷での人生が始まる……

# 「1人の鬼と災人」その2

第2話

……

翠 「んあ……？どこだこ……？」

訳の分からぬ「スキマ」とかいう場所から穴に落ちて氣を失つていたようだ。

目が覚めると森の中で倒れていた。

時刻は：分からぬがよるだろうか？

でも俺のいる場所だけ少し明るい。横を見ると焚き木があつた。

??? 「おつ、目が覚めたかい？」

焚き木の炎の奥から声がした。

体を起こして声のした方向を見るとそこには女の子がいた。

背丈は小学生くらいだろうか？

紫よりすこし淡い？薄い？そんな金髪のロングで両腕と片足に鎖を付けていた。

…そして何より気になる…

翠 「あ、ああ……それよりアンタ……」

萃香 「ん、ああ私か？私は伊吹 萩香、萃香でいい。お前さんが森のど真ん中で倒れてたんではほつとけなくてな」

翠 「そ、そうか。おれは進来 翠だ、翠で構わない。それよりアンタその頭……」

俺がそう聞くと萃香は少し不思議そうな顔をしたあと、ああこれが、と自分の頭に生えていた二つの角を指さして確認してきた。

萃香 「お前さん……じゃなかつたな。翠は多分外の世界から来たんだろうから信じられないと思うが、私は鬼なんだ」

……鬼？鬼って言つたかこの子。そりやお伽噺やゲームでなら見たことはある。確かに角も生えている（？）

けどもつとこう…筋骨隆々で巨漢じゃないのか？そもそも鬼なんて実在するのか？

萃香「ほらね。鬼なんてホントにいるのかー? つて顔してると

ま、紫に突然連れてこられたんだろう。どれ、この幻想郷の事を少し話してあげるよ」

俺は既にキヤパオーバーしてる頭に必死に詰め込もうとした。

ここは幻想郷という俺のいたいわゆる「外の世界」から結界によつて隔離された場所で、妖怪、魔法使い、幽霊、鬼、天界や地獄など、外の世界では幻想、想像上とされていたものが実在するらしい。

この幻想郷の住民の中には能力というものを持つている奴もいるらしい。

翠「お、オーケー……まだ全部は理解できなkieど……取り敢えず夢とか幻覚じやない事は分かつたよ…」

萃香「ま、最初はそんなもんだよ。あたしみたいに外の人間に友好的なやつにでも合わなきや好戦的なやつに喰われてたかもか」

外の世界、なら笑える冗談だ。意味がアーツ!なもので済ませられる冗談だからな。でもこっちじやそうでもないみたいだ。

夜で感覚が研ぎ澄まされて敏感だからだろうか、木の影から時々視線を感じることがある。それも殺氣? って言うものに近い気がする。

萃香「気になるか? 周りのヤツらがソワソワしている俺に萃香が聞いてきた。

翠「ま、まあ……」

萃香「安心しなよ、あたしは鬼だ。同じ種族か知り合いでもない限り近づいてきやしないよ」

そう言う萃香は笑つてこそいたが少し悲しげだつた。

それと同時に何か同じ物を感じた気がした。  
きつと「1人だった頃」があるんだろう。

萃香「ほら焼けたよ! 食いな!」

話題を切るように萃香は大きな声を出した

ハツと我に返ると萃香が串に刺した焼き魚を俺に分けようとしていた。

塩も何もかけていない、ただ魚を串に刺して焼いただけだが、今まで見てきたどの食べ物よりも美味しそうに見えた。

翠「いいのか？一つしかないみたいだけど…」

萃香「あたしは構わないさ。それより早く食べな！冷めちまうよ」  
俺は礼を言つて焼き魚にがつついた。

：美味い。今までこんな食べ方で食べた事ないはずなのに、どこか懷かしい

萃香「ちょ、ちょつと翠！あんた何で泣いてんだい!?そ、そんなに不味かつたか!?」

気がつくと俺は涙を零していた。悲しかつた訳でも、辛かつた訳でもない。

何故だか涙が止まらない。

俺は今までの事を萃香に話した。

両親に捨てられた事、いじめられていた事、育ててくれた夫婦と唯一の友人が死んだ事、身の回りで事故が起くる事、「災いをもたらす」なんて言われていた事

その果てに自殺しようとしていた事……

萃香はただ黙つて聞いてくれた。

萃香「そんな事かい？」

返つてきた言葉は意外なものだつた

翠「そんな事つて…こつちはどれだけ辛かつたか…」

萃香「だからそんな事かいって」

俺は苛立ちを隠せなかつた。死ぬ覚悟が出来るほどに辛いことがあつた。夫婦も友人も、関係の無い人までも多くの人が死んだ。それを「そんな事」で済ませた萃香に腹が立つた。

翠「アンタなあ！何人も俺の周りで人が死んだんだ！誰かが死ぬ度に！周りから虐められた！」

でも…それでも生きてやろうつて！強く生きてやろうつて思つても……思つても……結局は弱いまま終わつたんだよ！」

俺は声を張り上げて言つた。今まで溜めてた鬱憤、悲しさ、辛さ。思いのままに吐き出した。

翠「ハア…ハア……いいよな萃香は…鬼だから最初から強かつたん

だろ？」

俺がそう言うと萃香は少し笑い、でもその目は力強く眞面目に感情の入混ざった俺にこう答えた。

萃香「確かに、あたしは強かつた。それはもう敵う者がいないほどに……いや『強すぎた』んだ。」

萃香はまた、少し悲しげな顔をして続けた

萃香「なあ翠、お前さんは強ければいいって思つてるか？」

翠「そりやそ ударов…」

そうだ、強ければ守れる。猛スピードで突っ込んでくる車にだつて、上から落ちてくる鉄柱からだつて、強ければ止められる、弾き返せる、助けることが出来る。

萃香「そうか…あたしもそう思つていたよ。強けりや守れる。怖いものなんてない。

……でもね、余りにも強すぎて逆に恐れられたんだ。

近づけば殺されるだの、村に行けば壊されるだの。

ある日、それでも仲の良かつた人間と森を散歩していた。あたしが冗談交じりに背中をドンツと叩いた時、そいつの半身が吹き飛んだ。自分でも恐ろしくなつたよ。

確かに力があれば勝つことは出来る。でも守る事は…できないんだよ？」

そう言う萃香は最後にまた笑つて見せたが、やはり悲しそうだった。

強ければ守れる。そう思つていた俺の考えを消すには十分過ぎた。

翠「あ……すまない…」

萃香「いいんだ…あたしも人々に人間と話せたよ。

翠がまた死にたいなんて思つた時は、あたしが手を差し伸べてやるよ！」

その言葉を聞いた時、また涙が零れた。

災いだの死ねだの言われてきた俺に、唯一「手を差し伸べてやる」と言つてくれた。

萃香「さて…そろそろ行かなきやね」

萃香が立ち上がり、そう言つた

翠「…もう行くのか？」

見ず知らずの俺を助けてくれたんだ。無理や我が儘は言えないが  
…もう行つてしまふと思うと寂しかつた。

萃香「ん？ 行くつて、翠もだぞ？」

翠「……え？ 何処に？」

萃香「外の世界から人が来たらまずある場所に行くんだ」

萃香が東の方に見える山の頂上を指さして言つた

「博麗神社」

# 第一章 ゆきかたの力 ゆきかたの力

## 第3話

翠 「博麗・神社…？」

突然萃香から一緒に行くと言われた神社。

聞いたこともない神社だ。

どうやら幻想郷と外の世界を隔てる結界の中心部みたいなところらしく。

外から来た人は取り敢えず博麗神社に行くそうだ。

萃香 「ほら、行くぞ！」

翠 「こんな夜更けなのに大丈夫なのか？」

萃香 「ん、まあ靈夢の事だし大丈夫だろう！」

それに歩いて行くからつく頃には朝だろうしな  
ん？ てことは夜通し歩くってことか？

歩くのは好きだからいいとして夜通し？

体力が持つかなあ…

そんな事を考えながら俺は腰を上げて萃香について行つた。  
歩いている途中、黙りっぱなしの詰まらないので幻想郷についていろいろと聞いてみた。

人里がある事。

紅魔館という屋敷があること。

命蓮寺という寺がある事。

香霖堂という外の物が売っている店があること。

様々な妖怪、幽霊、人がいる事。

聞けば聞くほど幻想郷の社会は割としつかりしていた。

そもそも種族が違うのに情報を交換しあつたり

新聞があつたり

事件が起きればそれを解決する人がいたり

翠 「結構しつかりしてるんだなあ…」

萃香 「だろう？昔はこうじやなかつたんだけね  
そこの博麗神社の現巫女、靈夢のおかげさ！」

どうやらその靈夢という人物は今の幻想郷のシステムを作り上げ  
妖怪と人間とを和解させた

とにかく凄い人物だそうだ

翠 「なあ、その靈夢つて人も強いのか？」

萃香が余りにも褒めるものだから気になつてつい聞いてしまつた

萃香 「靈夢か？そりやもう強いで

ただあたしや妖怪みたいに単純な力が強いんじやない

あれは：守る力だよ

力無き者が、それでも護りたいと想う者が

編み出した本当の強さ

そうあたしは思つてるよ」

守る力：本当の強さ。

その響きに心を惹かれた。

すこし湿っぽい話になつて話題がなくなつてしまつた

何か話さないと：

翠 「そ、そういうえばさ」

萃香 「ん、なんだい？」

翠 「幻想郷の人の中には能力…？」

を持つてゐる奴がいるつて言つてたけど、萃香もなのかな？」

能力持ち、男子なら憧れる。

なによりカツコイイ

自分がけの特別な能力

何度妄想の中で描いていたことか

萃香 「もちろんあるよ

あたしは「密と疎を操る程度の能力」  
つてのをもつてるよ！」

翠 「密と疎？」

萃香 「まあ言つても分からない

ほら！」

そう言うと萃香が隣から消えた  
と思つたら目の前にいた。

余りに突然の事で尻餅をついて驚いてしまつた。

翠「うおっ！」

萃香「あははっ！大丈夫かい？」

驚かせてすまないね

簡単に言うと質量を操れるのさ

極限まで少なくして霧状になつたり小さくなつたり  
逆に大きくして巨大化したり

そんな能力さ」

そんな能力つて…程度で済むものなのかな？  
しかしすごい能力だ。霧状つて物理攻撃無効じやないか。

萃香「ほらっ、手貸すよ」

萃香が俺を起こそうと手を貸してくれた

その時、

萃香の後ろから何かがやつてきた  
暗がりで見えにくい上

音もなく、とても速く迫つてくる  
明らかに人の形をしていないし  
殺氣を感じる。

萃香を見ると俺を起こそうと気付いていない

…守らなきや…

あつてまだ少ししか立つてないけど

…守らなきや…

萃香が鬼でどんなに強くても

…守らなきや…

初めて、手を差し伸べてやると言つてくれた人だから

…守らなきや…

俺は強くないけれど

……守らなきや！

翠「萃香！危ない！」

俺は萃香の手を掴み

もう片方の手で勢いよく体を起こした。

萃香の手を掴んだまま手を横に振り

萃香を横に飛ばした

次の瞬間

音もなく向かつてきた何かが

俺に勢いよくぶつかり、大木に押し付けた。

翠「…っ！」

萃香「翠！」

余りに一瞬の出来事で痛みは無かつた。

俺は自分の体を見ると

角のようなものが右胸を貫き

下半身が喰われていた。

萃香「なんで！言つただろう！あたしは鬼で強いんだって！」

徐々に痛みを感じはじめ

出血も多く、意識が薄れ始めた。

残った力を振り絞り、萃香の方を見て

なるべく笑顔で答えた

翠「…つたから…」

初めて…手を差し伸べてやるつて言つてくれたから…

二年前に友人が死んで…

先月、育ての親が死んで…

その後も俺のせいなのか…多くの人が死んで…」

カスカスの声を振り絞りながら喋つているなか

何かは俺の体を喰い続けてる

萃香は…額から汗を流し焦つているようだ

翠「もう…俺の周りで人が死ぬのは嫌なんだ

思い出や…恩があるやつは尚更な…

最後に…誰かを守る事が出来て

よかつた…よ」

もう意識を保つのが限界だ

血はダラダラと流れ

もうすぐ下半身も噛みちぎられる

俺もここまでかと思つたとき

急に何かが咬むのを止めた

隣には萃香がいて両手で何かの口を広げていた

萃香「まさか鬼が人間に助けられるなんてね

言つただろう？手を差し伸べてやるつて

翠の事：気に入つたよ！」

萃香が何かの口を勢いよく大きく広げると

俺の体をが一瞬浮いた。

何かの牙が外れたのだ。

その刹那、萃香が蹴り上げた

その小さく華奢な体からは想像出来ないほど

重い音がし、何かの顎が吹き飛んだ

そのまま体を捻りもうひと蹴り

何かは粉微塵になつた

そのまま萃香は落ちる俺を受け止めた

俺の体から牙が外れ、落ちるまでの間に

これだけの動きをしたのだ

萃香「大丈夫かい…」

萃香はなるべく表情には出さないようにしているが

心配している様子がわかる

俺を抱えている手が震えている

幸いまだ意識はある

翠「へへつ……なんとかまだ生きてるよ…  
もうダメそうだけどな…」

萃香「全く…無茶するよ

鬼を助ける人間なんて聞いたことがないよ」

翠「鬼も何も…関係ないさ…」

森で倒れてた俺を助けて…

飯も…くれた…それだけで十分だ…」

流石に意識が遠のいてきた

呼吸をする、目を開けている事さえ

疲れてきた

こつちに来て短いけど

生まれて初めて

本当に守ることができた

翠「……守る事に…強さはいらぬいんだな…」

そこで俺の意識は途絶えた。

翠「萃香！危ない！」

：初めて人に助けられた

人に忌み嫌われ、妖怪からも恐れられ

妖怪と人との和解した今こそ

嫌われる事は亡くなつたものの

助けられたなんてことはない

ずっと独りだつた

強いから大丈夫だと思われていた

あたしも自分の強さに酔つていた

萃香「鬼も何も関係ない…か」

あたしは不思議な感情を抱いていた

手を差し伸べてやる

鬼は嘘はつかない

けどそれとは別に…

たとえそう言つていなかつたとしても

助けたい。そう思つていた

萃香「はあ：仕方ないねえ」

あたしは近くに落ちていた何かの牙を拾い上げた  
なるべく傷口に泥が入らないよう

翠を下ろし、拾った牙を  
あたしは掌に刺し、血を流した  
その血を傷口に流し込み  
あたしの血を分け与えた  
あたしは翠を抱きかかえ  
博麗神社へと向かつた。

暖かい

ただその感覚だけが体を包んでいた  
体は動かない

今度こそ本当に死んだんだなと思つた  
けど何処からか声が聞こえる

……い

おーい……

……おーい！

うつすらと輪郭が見えてくる  
だんだんと意識がしつかりてきて  
視界がはつきりとする

翠「……あれ、萃香……

俺つて死んだはずじゃ…」

目の前には萃香がいた

俺が声を出すと途端に笑顔になつて

萃香「お、やつと起きたか

まだ生きてるよ」

体を起こそうとすると激痛が走つた

翠「い”つ！」

萃香「ああ！まだ起きるんじやないよ  
怪我は治つてないんだから！」

体を見ると包帯が巻かれていた  
噛みちぎられたと思つていた足は

まだ繋がつっていて

貫かれたはずの右胸も何故か塞がつてている  
翠「ここは一体…俺は何でまだ生きてる?」

あたりを見回した所

和室にタンスや机が置いてある一部屋で寝ていたようだ

萃香「ここが博麗神社だよ

で、なんで生きてるかは…」

??? 「それは私から説明させてもわうわよ」

突然襖の向こうから声が聞こえてきた

麁が開き、声の主が現れる

紅白の衣装を身にまとい

頭には赤いリボン

お下げにも赤い筒(?)のようなものが二つあつり  
茶髪でロングの少女だった

靈夢「初めまして。私は博麗 級夢。 級夢でいいわ

萃香から話は聞いているわよね」

翠「進来 翠だ。翠でいい」

靈夢「そう翠。で、貴方が生き延びてる理由だけど  
萃香に感謝しておく事ね

面倒な事にはなつたけ

あなたの命を助けた事に変わりはないわ」

萃香があの怪我を?どうやつて?

靈夢「今の貴方には萃香の血が流れているのよ  
所謂鬼の力つてやつね

それに伴い、貴方には鬼力(きりょく)が備わつた

その鬼力のおかげで再生能力が劇的に上がったのよ」

翠「そう…なのか?萃香」

萃香「へへつ…まあね」

萃香はすこし照れくさそうに

でも内心は嬉しそうに微笑んだ

よく見ると手には包帯が巻かれていた  
きつとそこに傷を作つて血を流したんだろう

萃香「でだ靈夢

翠の世話なんだが…」

そうだ、俺はこれからどうすりやいい  
でもきつと靈夢の事だ  
真面目そうだし優しそうだし  
居候させてくれるに違いない  
うんうんそうだ

靈夢「嫌よ面倒臭い

目が覚めて動けるようになつたら  
出てつてもらうわよ

食費がかさむ」

前言撤回

かなりのめんどくさがりだ

食費がかさむ？食費がかさむって言つたか！？

靈夢「だいたいね萃香！

あんたのせいで外に返す事も出来ないのよ！」

萃香「ええー！ケチんぼ！」

ん？外に返せない？

帰れないってことか？

それはそれでもいいんだが何故だ？

翠「えつ、何で？」

そう聞くと靈夢がため息をついて答えた

靈夢「翠、貴方に鬼の力が混じつた所までは話したわね

萃香が貴方に血を分けたことで

貴方も厳密には人じやなくなつたのよ  
さしづめ半人半鬼はんじんはんきつてところね

そんな人じやない人を外に出せると思う？」

それを聞いた俺は驚いた

半分人間で半分鬼らしい

その後靈夢から傷口を見てみると

と言われたので見てみると

さつきまで激痛が走っていたのに  
もう何ともない。傷跡こそあるものの  
完治している

翠「治…つてる…すげえ…」

傷は完全に治り

もう動いても不自由ない

萃香「おっ！治ってる！良かつたあ…」

元気になつた俺を見て萃香は安堵していた

どうやら結構心配してくれたらしい

そこまで気にかけてもらえると何だか照れてくる

靈夢「さ！動けるなら出てつてよね！」

こつちも忙しいんだから！」

そう言いながらも出していく前に

ご飯を用意してくれていた

やつぱり靈夢は優しい人のようだ

⋮⋮⋮

ご飯も食べ終わり

出でいく支度を整えていた時

萃香が話しかけてきた

萃香「なあ翠」

翠「ん？なんだ？」

萃香「翠は鬼も何も関係ない  
つて言つたよな

それは…その

これからも仲良くしてくれるつてことが？」

萃香は少し不安そうに聞いてきた

ずっと独りで嫌われてきたからだろう

それは俺も同じだつた

翠「もちろんだよ

萃香は俺を助けてくれたんだ

自分の体を使つてまでな

俺ももつと仲良くなりたいって思つてるよ！」

そう言うと萃香は嬉しそうに笑つた

そして俺に手を出してきた

萃香「な、なら握手してくれるか？」

大丈夫だ、力加減は出来ると思う」

昔の事もあるのか少し震えていた

だけど俺はその手をしっかりと

握つて握手した

感謝の気持ちも込めて

翠「よろしくな、萃香！」

彼女は満面の笑みで

力強く握り返してきた

その力は確かに鬼の力がだつたが

その手はとても優しく暖かいものだつた

।

外に出ると境内と鳥居が見えた

鳥居まで歩き、神社を出ようとすると

靈夢が声をかけて止めてきた

靈夢「そういえば一つ言い忘れていたわ

翠が半人半鬼になつたことで

貴方にも能力が備わつたのよ」

翠「能力：？」

それは嬉しい事だつた

能力！ついに俺にも！

高鳴る気持ちを抑え

靈夢にどんな能力か聞いた

靈夢「ええ、輸血元が萃香だから

似通つた能力よ

さしずめ……」

「密とを操る程度の能力」

## （密の能力）

### 第4話

翠「密を操る程度の能力……か」

博麗神社を後にする時に告げられた  
俺が手にした能力……

密を操ることは翠香の言つてた通りなら  
巨大化出来るということになる。

翠香「しつかしまあ」

半人半鬼になるとは思つてたけど  
能力まで付いてくるとはね！」

翠「ははは……

でも男子としては少し興奮してるよ」

今は博麗神社を出て俺がどこで過ごすかを  
翠香と一緒に幻想郷の案内ついでに探している  
隔離された世界、なんて聞いたから  
もつと村みないな大きさかと思つたらそうでもない  
結構広い

森があつて、山があつて  
湖があつて、村があつて  
地底まであるという

翠香「さてと、じやあままずはこつから近い  
魔法の森でもいこうか！」

翠「魔法の森つてところには何があるんだ？」

翠香「魔理沙つてやつの家があるかな  
一応魔法道具店だよ

あとは……

森境のほうに霖之助つてやつが外の世界のもの売つてる

香霖堂つて場所もあるな」

ほう、道具店もあるのか

どうやら生活に困ることは無さそうだが  
でも金とかないしどうしたら…：

翠「なあ、店があるんだつたら

買い物とかもしたいんだけどさ。

金とかってどうすればいいんだ？」

そう聞くと萃香は少し悩んでいた

それは彼女がずっと自然で生きてきたからか  
ものを買うという事をしないらしい

萃香「まあなんとかなるつて！

なんならしばらくはあたしと行動するかい？」

翠「ん？ 萃香が買ってくれるのか？」

萃香「いや、皆が分けてくれるのさ」

どうやら萃香はこの幻想郷で起ころる

「異変」と呼ばれるものを解決したり

異変が起こっている最中

人里を保護したりして

村人からはそのお礼として食べ物や道具をくれるそ�だ

萃香「あたしみたいな鬼や妖怪はさ  
力ずくつてのも出来るんだ

だけどそれじや恨まれてしまう

そんな思いして食う飯は不味いからね  
こうして協力し合つてるのさ！」

翠「協力し合う……

俺にも出来るかな」

そう呟くと萃香は

萃香「そのうち出来るつて！」

と言つて軽く背中を叩きながら励まそ�と  
……していた

しかし背中を叩こうとした手は途中で止まり  
少し怖気付いて手を後ろに回し

咳払いをした

萃香「でもその前に能力を使えるようにならなきやな！」

翠「そ、そうだな。でも密を操るつてどんなんだ？」

萃香「あたしと同じなら質量の増加だから  
大きくなる。

ま、巨大化つてどころかな？

翠は後天的に能力が備わったわけだから  
まずは利き腕が大きくなる！

つてイメージをすれば能力を体験できるかな？」

やはり能力はイメージなのか

俺は萃香に言われたように

利き腕の右腕が「大きくなる」

というイメージをした

……しかし変化がない

イメージや意識をしているからか

右腕にいつもより力が入っている感覚はあるが  
まるで変化がない

萃香「あれ？おかしいな：

あたしらはこうやって能力使ってるから

同じようにイメージすれば使えると思つたのに」

俺はまだイメージが足りないのか

と思い更に、もつと「大きくなる」

と、強いイメージをした

その時……

「右腕が重すぎる」

そう感じた

力を無理にいれてるとかそんなんじやない

まるで重りを持つているようだ  
まだまだ重くなっていく

右腕の重さに耐えられなくなつた俺は  
座り込んで右腕を地面の上に脱力するよう  
にスッと置いたその時

ズシンッ!!

右腕を置いた地面はひび割れ  
まるで小さなクレーターのように  
砕けた

萃香・翠「……え？」

人が地面を殴つたつて砕けない

鬼だつて殴らなきや砕けない

ただ脱力して落とすように右腕を置いただけで  
地面が砕けたのだ

俺も萃香もしばらく驚いて固まつていた

二人揃つて口を開けて

しばらくして俺は萃香の方を見て

翠「な、何が起きた…？」

と話し掛けたみた

萃香はまだ驚いているようで  
少ししてからハツと我に返つて

萃香「わ、わからないよ

いくら翠か半人半鬼になつたつていつても…」

2人はしばらく黙り込んでいた

その間に右腕の重さは元に戻つて

普通に動かせるようになつていた

萃香「で、何が起きたんだい？」

翠「大きくなるつてイメージしてたら

右腕が凄い重たく感じたんだ  
で、重すぎて耐えられなくて

地面に座り込んで腕を置いたらこうなつた」

2人はまた黙り込んだ

しばらくして萃香は

香霖堂に行こう、と提案した

店主の森近 霖之助という人物は

半人半妖で博識らしい

その人物を尋ねれば何かわかるかもしれない

「香霖堂」

外見は普通の家のような見た目だ

入口の上に「香霖堂」という看板があり  
中を覗くと写真で見たことがあるような  
昔の「外の世界」の道具があつた

俺と萃香は扉を開け、中へ入っていく

??? 「いらっしゃ：なんだ萃香か。

隣の男性は？」

青と黒の服

赤い箱の様なものを首から下げた

銀髪でメガネをかけた男が話しかけてきた

萃香「よう！こーりん！

こいつは幻想入りしてきた翠つてやつだ  
訳あつてもう人じやないけどね」

霖之助「どんな訳だよ…」

初めまして。俺は森近 霖之助

外の世界の物を売つてる」

翠「は、初めまして

進来 翠です

大怪我したところを萃香に命を助けられて

半人半鬼つてのになりました」

そう翠が自己紹介すると

霖之助は翠をじっと見た

頭のてっぺんから足のつま先まで  
何回か上下に見ると

「ああ、そういう事か」

と言つて納得した

霖之助「それで、何の用だい」

萃香「翠の能力がな

密を操る程度の能力なんだけど

その仕組みがあたしのと違うみたいなんだ  
詳しい内容を考えてもらいたくてね」

萃香がそう言うと

俺と萃香は魔法の森で起きた  
俺の話を事細かに説明した

それを聞いた霖之助はしばらく考えた後に  
店の奥に行つて何かを探していた

しばらくして霖之助が奥から戻ってきた

その手には体重計があった。

霖之助「取り敢えずこの上に腕を乗せてくれ」

そう言われた俺は言われるがままに

体重計に腕を乗せた

いつたい何をするのか

これで俺の能力がわかるのか

とにかく疑問だらけだった

すると霖之助が

霖之助「よし、じゃあ腕が「大きくなる」  
イメージをしてくれ」

翠「は、はい」

俺は大きくなるイメージをした

やはり力を入れてるからか

腕が重くなる感じがする

ふと体重計の針を見ると

どんどん重くなっている

力を入れて押し付けてるなんてもんじやない

自分の体重を超えた始めた

そのあたりから霖之助が

俺の腕を触り始めた

つついたり、指圧したり

数秒間さわって

霖之助「よし、いいぞ。

イメージを止めるか

元に戻るイメージをするんだ」

と言つてきた

俺は元に戻るイメージをした

すると体重計の針は戻つてゆき

最初に乗せた時と同じ数値になつた

霖之助「翠の能力の詳細がわかつた」

萃香・翠「ホントか！」

霖之助の話によると

俺の場合、どんなに大きくなろうとしても

大きくならないらしい

そのかわり重量の増加

それに比例して肉体の硬質化がある

しかし体も大きくなる萃香と異なり

体の大きさはそのままなので

あくまで重くなつた身体を支え

動かしていくのは自分の筋力次第

……だそ、うだ

霖之助 「加えて翠は元々は人間で  
いまでは半人半鬼だ

鍛えれば力の向上率は  
人のそれを優に超える」  
萃香 「す、凄いじやないか翠！」  
霖之助 「ま、密を操る程度の能  
力」というよりは

「密度を操る程度の能力」 だな」